

## 再演されるドラマ——元雜劇「趙氏孤児」試論

廣瀬 玲子

はじめに

元雜劇「趙氏孤児」は春秋時代の晋を舞台とする復讐のドラマである。十八世紀にヨーロッパに伝わって翻訳・翻案され、近年中国で映画が制作されるなど、空間と時間を超えて受容されてきた、中国伝統演劇のなかでは稀有な作

(1) ヨーロッパに紹介された経緯については、後藤末雄『中国思想のフランス西漸』全三卷(平凡社東洋文庫、一九六九年)「底本は『改訂増補中国思想のフランス西漸』(養徳社、一九五六年)、初版本は『支那思想のフランス西漸』(第一書房、一九三三年)」の第一卷二四九—二五〇頁、第二卷九五—一二五頁に詳しい(ただし中国演劇についての記述には誤解も見られる)。第一卷末尾の「解説」(島田謹二)も三三九—三四四頁で「趙氏孤児」の受容について補説し、英語による翻案にも論及している。范希衡『趙氏孤児』与『中国孤児』(上海古籍出版社、二〇一〇年「一九六五年完稿」)は、ヴォルテールによる翻案(一七五五年にパリで上演)との比較研究である。

再演されるドラマ——元雜劇「趙氏孤児」試論

品である。<sup>(2)</sup> 本稿では、「趙氏孤児」が、歴史記述にすでに具わっていた演劇的要素を踏まえつつ、細部の合理化を図り、人物の設定を変更して、演劇ならではの表現を達成していることを明らかにしたい。<sup>(3)</sup>

「趙氏孤児」には元刊本と元曲選本が伝わる。元刊本は曲文のみでせりふがないため筋がたどりがたいが、ほぼ同じ構成であると推測される。ただし、元刊本がおそらく復讐を決意する場面で終わっているのに対し、元曲選本には第五折が付加され、孤児が復讐を果たして趙氏がかつての地位を回復する場面が演じられる。おおよその流れは一致するので、まずは元曲選本に基づき、あらすじを示そう。

晋の靈公の時代、武官の屠岸賈と文官の趙盾が対立し、屠岸賈は趙盾を殺そうとするが何度か失敗したのち、趙氏一族三百人を誅殺した。趙盾の息子の趙朔は公主（靈公の娘）の夫であるため生き残ったが、屠岸賈は靈公の命といつわって自害を強要する（楔子）。

公主はこのとき妊娠しており、男子を生んで、出入りの医者程嬰に託したのち縊死する。程嬰は孤児を薬箱に隠して運びだそうとし、屠岸賈の命令でやしきの門を見張る韓厥につかまるが、韓厥は二人を逃がして自刎する（第一折）。

孤児が逃げたと知った屠岸賈は生後一月から半年までの嬰児の皆殺しを図る。程嬰は、公孫杵臼（趙盾とともに靈公に仕えたが、致仕して太平庄に隠居）と相談して、自分の子を孤児に偽装する計略を立てる（第二折）。

程嬰は我が子を太平庄に届けたあと、屠岸賈に公孫杵臼が孤児をかくまっていることと密告する。公孫は拷問を受けても知らぬふりをするが、赤子が見つかって殺され、公孫は自殺する。屠岸賈は程嬰に感謝し、程嬰の子（実は孤児）を義子とする（第三折）。

二十年が経ち、孤児は程嬰の子程勃、屠岸賈の義子屠成という二つの名を持つ文武両道の若者に育つ。程嬰から絵巻物を見せられ、自分が趙氏孤児だと知る（第四折）。

程勃（孤児）が屠岸賈を待ち伏せして捕え、上卿の魏絳によって刑罰が宣告される。孤児は趙武と名のつて地位を回復し、程嬰や功勞のあった死者は顕彰される（第五折）。

忠臣対奸臣の対立から、奸臣による忠臣の一族皆殺し、一人生き残った孤児の救出、成長した孤児への真実の告知、そして復讐と、二十年の長きにわたる壮大なドラマである。趙盾と屠岸賈は最初から「文」対「武」、「忠臣」対「奸臣」、「善」対「悪」の構図のもとにあり、たとえば、趙盾がどのように忠良であるのかが具体的に示されることはない。屠岸賈もひたすら趙盾を憎んで一族を殺そうとするものの、なぜそれほど憎むのか、その理由は定かでない<sup>4</sup>。この二人および趙朔・趙武については、人格というほどのものは描かれていないのである。

(2) 同じ題材による作品には、宋元南戯（徐渭『南詞叙録』宋元旧篇の題目リストに「趙氏孤児」、明伝奇『八義記』、地方劇などがある。

(3) 日本における先行研究としては、竹治貞夫「元曲趙氏孤児の構成」（『徳島大学学芸紀要人文科学』3、一九五三年）、蘇英哲「元曲「趙氏孤児」の悲劇的性格について」（『大正大学研究紀要 仏教学部・文学部』72、一九八六年）、赤松紀彦「趙氏孤児劇小論—元雑劇に於ける「悲劇」の一断面—」（『金沢大学教養部論集 人文科学篇』25—1、一九八七年）、林雅清「中国と日本の復讐劇における死の描写—元曲「趙氏孤児」劇と「仮名手本忠臣蔵」を例に—」（『京都文教短期大学研究紀要』52、二〇一四）などがある。また、後藤裕也・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選』（東方書店、二〇一六年）に全訳が収められているが、本稿の引用箇所は翻訳は廣瀬による。

一方で、強い意志にもとづく行動が際立つのは程嬰・韓厥・公孫杵臼、および過去の出来事としてその行為が何度  
も言及される鉏麴・靈輒・提弥明ら、正義の人々である。彼らは自らの立場や職務も顧みず、直面した状況のもとで  
何をするのが正しいのかを判断し、行動する。この傾向は、歴史書の記述にも見られるが、戯曲ではさらに強調され  
る。

### 一 歴史書の記述

まず、本劇のもととなった歴史書の記述をまとめておこう。

『春秋左氏伝』（以下『左伝』と略す）や『史記』晋世家・趙世家によれば、晋の靈公は倨傲なる暴君で趙盾が諫め  
ても聞き入れず、趙盾を殺そうとする。趙盾は他国へ逃げようとするが、国境を越える前に一族の趙穿が靈公を殺し  
たため、史官に「趙盾、その君を弑す」と記された（靈公十四年、伝、B.C.607）。

靈公のあとを次いだのは成公、そのあとが景公である。『史記』趙世家によれば、この景公の時代に屠岸賈と趙朔  
（趙盾の子）が対立し、屠岸賈は、かつて君主を弑した賊がいたことを口実として、趙氏一族を滅ぼした（景公三  
年、B.C.597）。趙朔も殺されるが、このとき妻（成公の姉）は妊娠しており、程嬰（趙朔の友人）は公孫杵臼（趙朔  
の食客）と相談して孤児をかくまう。十五年後（景公十七年、B.C.583）に景公が病にかかり、占うと、祀りの絶え  
た者の崇りであるという結果が出る。孤児（趙武）が生きていることを知っていた韓厥は、景公にそのことを告げて  
將軍たちを味方につけ、彼らは程嬰・趙武とともに屠岸賈を攻めてその一族を滅ぼす<sup>6)</sup>。

(4) 楔子の冒頭で屠岸賈が登場したときのせりふに次のように言う。

某乃晋国大将屠岸賈是也。俺主靈公在位、文武千員、其信任的只有一文一武。文者是趙盾、武者即某矣。俺二人文武不和、常有傷害趙盾之心、争奈不能入手。

また、第一折の程嬰のせりふには、「想趙盾晋室賢臣、屠岸賈心生嫉妬」とある。趙盾は本劇の登場人物ではなく、終始、他の人物によってその名が語られるのみである。ちなみに、歴史書では趙盾は必ずしも文官というわけではない。

(5) 同じ『史記』であっても晋世家には屠岸賈への言及はなく、景公十七年(BC523)の出来事として次のような簡単な記述がある。これによれば趙武は嫡子ではなく庶子である。

十七年、誅趙同趙括、族滅之。韓厥曰、趙衰趙盾之功豈可忘乎、柰何絶祀。乃復令趙庶子武為趙後、復与之邑。

晋世家のこの記述は、『左伝』成公八年(BC533)の経に「晋殺其大夫趙同趙括」とあるのと一致する。『左伝』にも屠岸賈はまったく登場せず、伝には別の原因が記されているが、韓厥の進言により趙武を後継者とするのは共通する。

以上のことからわかるように、歴史書の記述がすべて事実であるわけではない。前掲(注3)の竹治論文は次のように述べる。

屠岸賈を敵役とするこの劇的事件が、史実として疑うべきものであることは、すでに清の趙翼が其の矛盾を挙げて駁し、又左氏会箋も九ヶ条の謬を指摘して、之を小説家言に属するものとしている(十二頁)。

趙翼の議論は『陔餘叢考』巻五「趙氏孤之妄」の条に、『左氏会箋』の指摘は巻十二の成公八年の箋に見られる。

(6) 韓厥・公孫杵臼・程嬰については「新序」「說苑」にも記載があり、前者では「節士」(巻七)の話、後者では「復恩」(巻六)の話の一つとして収録する。

## 二 ドラマへの脱皮

雜劇「趙氏孤児」は、歴史的には景公の時代に起こった出来事を靈公の時代に移動させている<sup>7)</sup>。また、趙盾・趙朔を殺そうとするのは靈公ではなく、一貫して屠岸賈であるが、上述したように、特に理由があつてのことではない。舞台が靈公の時代に設定されているため、一族の者が靈公を弑したからという理由が成立しないことは言うまでもない<sup>8)</sup>。

その他の細部についても歴史書とのあいだには大きな差異が存在する。というより、歴史書の記述にはそもそも細部と言えないものがない。たとえば、どのようにして母親のもとから孤児を連れ出したのか、趙朔の友人であつた程嬰の裏切りが疑問視されることはなかつたのか、程嬰が眞の孤児とともに山中に隠れていて怪しまれることはなかつたのかなど、いずれも不明である。しかし、歴史書にはそれらを想像で補うことは許されない。司馬遷の記述は収集した資料に忠実であるからこそ、場合によってはつじつまの合わない（しかし無理につじつまを合わせない）ものとなつたのであろう。

一方で、俳優が演じることを前提として作られる戯曲においては、上演にとつての合理性が要求される。それが歴史書には書かれていない細部の具体的な表現となるのである<sup>9)</sup>。以下、ドラマの展開に沿ってそうした場面を見ていこう。

1 自死する人々——趙朔・公主・韓厥

雑劇では、前半で人が次々と自害する。楔子で趙朔が自死を迫られ、第一折で男子を出産した公主が縊死するほか、韓厥も自刎する。『史記』趙世家では韓厥はこのあと孤児が復讐を遂げるにあたって重要な役割を果たすのであるから、大きな変更である。

人物の死は演劇としての見せ場でもあるので、順を追って引用しよう。まず楔子における趙朔の死である。屠岸賈は趙朔の元へ使者を遣わし、次のようないつわりの君命を伝える。<sup>10)</sup>

(7) これに付随して、趙朔の妻も成公の姉から公主（靈公の娘）に変更される。

(8) 靈公は本劇の登場人物ではないが、せりふや曲辞でしばしば言及される。元曲選本は元刊本に比べて靈公への否定的な表現は少ない。公孫杵臼の曲辞「正遇着不道の靈公、偏賊子加恩寵、著賢人受困窮」（第二折【南呂一枝花】）が唯一のあからさまな批判である。

(9) 雑劇「趙氏孤児」は、直接に『史記』から取材したというより、宋元の語り物などに基づく可能性もある。吉川幸次郎「元雑劇研究」下篇第一章（『吉川幸次郎全集』第十四巻、筑摩書房、一九六八年）（二〇二頁）や、これにもとづく前掲（注3）の竹治論文は、明代に『東周列国志』として結晶した七国の軍談に取材したと断定している（十頁）。本稿はその可能性を認めつつ、テキストとして現存する『史記』（主に趙世家）と比較する。

(10) 以下、「趙氏孤児」の引用には臧晋叔編『元曲選』全四冊（中華書局、一九五八年）所収のテキストを用いる。

趙朔跪者、聽主公的命。為你一家不忠不孝、欺公壞法、將您滿門良賤、尽行誅戮、尚有餘辜。姑念趙朔有一脈之親、不忍加誅、特賜三般朝典、随意取一而死。其公主囚禁在府、斷絶親疏、不許往來。兀那趙朔、聖命不可違慢、你早早自尽者。

趙朔、跪いて主君の命令を聴け。おまえの一家は不忠不孝、お上を欺き法を無視したかどで一門の者は身分の高低にかかわらず悉く誅滅したが、まだ余罪がある。思えば趙朔とは親族としてのいささかの関わりがあるゆえ、誅殺するに忍びず、特に三つ（弓弦・藥酒・短刀）のなかから自ら死ぬ方法を選ぶという恩典を与えよう。一つ選んで死ぬがよい。妻の公主はやしきに幽閉して親疎を問わず交わりを断ち、往來を許さぬこととする。こら趙朔、君命であるからぐずぐずしてはならぬ。早く命を絶つのだ。

趙朔はこうして自害を迫られる。最後に妻の公主と言葉をかわし、復讐を願う場面は以下のとおりである。

〔旦見云〕天那、可憐害的俺一家死無葬身之地也。〔趙朔唱〕

【幺篇】落不的身埋在故丘。

〔云〕公主、我囑付你的說話、你牢記者。〔旦見云〕妾身知道了也。〔趙朔唱〕

分付了腮辺雨涙流、俺一句一回愁。待孩兒他年長後、着与俺這三百口可兀的報冤讐。〔死科下〕

（公主せりふ）天よ、我が一族が殺され、身を葬る場所もないのを憐れみたまえ。

（趙朔うた）身は故郷の土となることもなく、

（せりふ）妻よ、おまえに頼むことがあるから、よく憶えておいておくれ。（公主せりふ）かしこまりました。

(趙朔うた) ことづければほを涙が流れ落ち、一言ごとに悲しみが募る。子どもが大きくなつたなら、我ら三百人のために必ず仇を討たせてくれ。(死ぬしぐさ、退場)

趙朔は短刀で自害する方法を選択して果て、その遺言によってドラマの歯車が回り始めるのである。

第一折は、やしきに幽閉された公主が男子を出産するところから始まる。それを知つた屠岸賈は下將軍の韓厥にやしきの門を見張らせる。公主は医者程嬰を呼んで、子をかくまってくれよう懇願するが、程嬰には懸念がある。

(程嬰云) 公主請起、仮若是我掩藏出小舍人去、屠岸賈得知、問你要趙氏孤兒。你說道我与你程嬰也、俺一家兒便死了也罷、這小舍人休想是活的。(旦兒云) 罷罷罷、程嬰、我教你去的放心。(詩云) 程嬰心下且休慌、聽吾說罷淚千行。他父親身在刀頭死、(做擎裙帶縊死科云) 罷罷罷、為母的也相隨一命亡。(下)

(程嬰せりふ) 奥方、お身体をお起こしください。もしわたしがご子息をかくまったとしても、屠岸賈が気づけば奥方に趙氏孤兒を求めます。奥方がこの程嬰に渡したと言われれば、わたしの一族が死ぬのはかまわないとしても、ご子息も生きてはられません。(公主せりふ) もうよい、程嬰よ、おまえを安心させてあげましょう。(詩) 程嬰、心を煩わせずともよい、わたしが話し終わるのを聴けば涙があふれるだろう。この子の父親は刃に死んだ、(スカートの紐でくびれ死ぬしぐさをして) もうよい、母たるわたしも命を捨ててお供しましょう。(退場)

こうして公主は縊死するのである。生きているかぎり秘密をもらすおそれがあり、それが程嬰の、延いては孤兒の命を奪うことになりかねないからである。このあと程嬰は孤兒を葉箱に入れて運び出そうとする。やしきの門には韓厥がいて孤兒を見つけるが、程嬰からこれまでの経緯を聞いて見のがすことにする。ところが、程嬰はなかなかその

場を立ち去ることができず、怪訝に思う韓厥に対して次のように述べる。

〔程嬰云〕將軍、我若出的這府門去、你報与屠岸賈知道、別差將軍起來拏住我程嬰、這箇孤兒万無活理。罷罷、將軍、你拏將程嬰去、請功受賞。我与趙氏孤兒、情願一処身亡便了。〔正末云〕程嬰、你好去的放不下心也。〔唱〕

【醉扶歸】你為趙氏存遺胤、我於屠賊有何親。却待要喬做人情遣衆軍、打一箇回風陣。你又忠我可也又信、你若肯捨殘生、我也願把這頭來刎。

（程嬰せりふ）將軍、わたしがこのやしきの門を出て、おまえが屠岸賈に知らせたら、別に將軍を差し向けてこの程嬰を捕えさせ、この孤兒も決して生きてはいられまい。もうよい、將軍よ、わたしを捕えてゆき、その手柄で褒美をもらうがいい。わたしを趙氏孤兒とともに死なせてくれ。（韓厥せりふ）程嬰、おまえはどうしても安心できないのだな。

（うた）おまえは趙氏のために孤兒を守る。わたしは屠岸賈のやつに何の義理があるう。おまえに情けをかけて兵士を遠ざけながら、だまし討ちにすることなどあるものか。おまえが忠義を守るのであれば、わたしも必ず信義を守る。おまえが命がけなら、わたしもこの首を落としてみせよう。

韓厥もまた程嬰を安心させるために、知ったことを語らないために、自ら命を絶つ。こうして第一折では、二人の人物が死ぬこととなった。程嬰は孤兒を連れて公孫杵臼のいる太平庄へ向かう。

## 2 身替わりは我が子——程嬰

第二折・第三折は、程嬰と公孫杵臼が孤児を生き延びさせるための計略を立て、それを実行する場面であり、本劇の要に当たる。二人は相談して、孤児の身替わりを立てることに決め（第二折）、その計略どおりに公孫杵臼と身替わりの子が犠牲になり、真の孤児は程嬰に育てられることになる（第三折）。この流れは『史記』趙世家においても同じである。つまり、歴史記述にすでに、程嬰と公孫杵臼の演じるドラマが含まれているのである。

ただし異なる点がいくつもある。もっとも大きなちがいは、趙世家では孤児の身替わりは他人の子（原文…他人嬰兒）であるのに対して、雑劇では程嬰の実の子であるという点である。

この変更が必要とされたのはなぜだろうか。趙世家では、屠岸賈はあくまでも趙氏孤児を探し出して殺そうとしているのだが、雑劇では、三日以内に孤児が見つからなければ同じくらいの月齢の嬰兒を皆殺しにするという布告を出す。そこで、たまたま同月齢の程嬰の息子を身替わりとするのである。表面きは、自分の子が殺されるのを避けるために孤児の居場所を密告するという理由が立つため、屠岸賈に怪しまれる可能性も低くなる。そうでなければ、なぜ密告するのか不審に思われるであろう。また、観客（読者）から見れば、そもそも他人の子を身替わりにすること自体が理不尽である。歴史書にさらりと書いてあると疑問を感じずに読んでしまうが、生身の俳優が目の前で演じるとなると細部のリアリティが要求される。<sup>11</sup>

趙世家との第二のちがいは、二人のうちのどちらが孤児を育て、どちらが密告するかを決めるときの根拠である。

趙世家では、孤児を生き延びさせて趙氏の後継ぎとする（原文・立孤）のと死ぬこととはどちらが困難であるかという観点から、公孫杵臼が程嬰にこう言う。「趙氏の先君はおまえを手厚く遇したのだから、どうか困難なほうを成し遂げてくれ。わたしはたやすいほうを選んで先に死のう」（原文・趙氏先君遇子厚、子彊為其難者。吾為其易者、請先死）。すなわち、趙朔との関係の深浅によって役割を決めるのである。

雑劇では、公孫杵臼は趙盾とともに靈公に仕え、すでに隠退した七十歳の老人として設定されている。<sup>12</sup> 一方で程嬰は四十五歳であることが明示される。

〔程嬰云〕（…）老宰輔、我如今將趙氏孤児偷藏在老宰輔根前、一者報趙駙馬平日優待之恩、二者要救晋国小児之命。念程嬰年近四旬有五、所生一子、未経満月。待仮粧做趙氏孤児、等老宰輔告首与屠岸賈去、只說程嬰藏着孤児、把俺父子二人、一処身死。老宰輔慢慢的抬拳的孤児成人長大、与他父母報讎、可不好也。〔正末云〕程嬰、你如今多大年紀了。〔程嬰云〕在下四十五歲了。〔正末云〕這小的算着二十年呵、方報的父母讎恨。你再着二十年、也只是六十五歲、我再着二十年呵、可不九十歲了。其時存亡未知、怎麼還与趙家報的讎。程嬰、你肯捨的你孩児、倒將來交付与我、你自己告屠岸賈処、說道太平庄上公孫杵臼藏着趙氏孤児。那屠岸賈領兵校來拏住、我和你親児一処而死。你將的趙氏孤児抬拳成人、与他父母報讎、方纔是箇長策。〔程嬰云〕老宰輔、是則是、怎麼難為的你老宰輔。你則將我的孩児仮粧做趙氏孤児、報与屠岸賈去、等俺父子二人一処而死罷。〔正末云〕程嬰、我一言已定、再不必多疑了。

（程嬰せりふ）（…）公孫どの、わたしがいま密かに公孫どのの元に趙氏孤児を連れてきたのは、一つにはこれまでの趙駙馬（＝趙朔）からの優遇の恩に報いるため、二つには晋国の子どもの命を救うためです。実はわた

しは四十五歳近くなつて生まれた息子がおり、まだ一月経つていません。この子を趙氏孤児だということにして、屠岸賈に程嬰が孤児をかくまっていると告発していただければ、われら父子二人は一緒に死ぬことになりました。公孫どののゆつくり孤児を育て、成人になつたら父母の仇を討つというのが名案ではないでしょうか。(公孫杵臼せりふ) 程嬰、おまえはいまいくつだ。(程せりふ) 四十五になりました。(公孫せりふ) この子が父母の復讐を遂げられるのは二十年経つてからだ。おまえは二十年後でもまだ六十五、わしの二十年後は九十ではないか。そのときに生きてるかどうかもわからない。そのうえ趙家の仇をとることなどどうしてできよう。程嬰、おまえが自分の子を犠牲にしてもいいのなら、わしに預けてくれ。おまえは屠岸賈のところへ行つて、太平庄の公孫杵臼が趙氏孤児をかくまっていると密告するのだ。あいつめが兵士を連れてやってきて捕まえるなら、わしはおまえの子とともに死ぬ。おまえが趙氏孤児を育て、成人になつたら父母の仇を討つ、それこそが良策だ。(程せりふ) 公孫どの、それはそうですが、どうして公孫どのにそこまでしていただけるでしょう。わたしの子を趙氏孤児ということにして、あなたが屠岸賈に通報し、われら父子二人が一緒に死にましよう。(公孫せり

(11) 第一折・第二折に該当する箇所は、『史記』趙世家では次のとおり。趙朔の妻が男子を生むと屠岸賈が宮中を搜索するが、男子は母のスカートに隠されて声を立てなかつたため見つからずに済んだ。その後程嬰と公孫杵臼が孤児を守るための相談をする。二人は他人の赤子を手に入れて背負い、上等なおくるみに包んで山中に隠れる(原文…乃二人謀取他人嬰兒負之、衣以文葆、匿山中)。

(12) 程嬰のせりふに「他与趙盾是一殿之臣、最相交厚。他如今罷職歸農。那老宰輔是箇忠直的人、那裏堪可掩藏」(第二折)とある。

ふ) 程嬰、わしは一度言ったことは曲げないから、もう心配するな。

どちらが偽の孤児と一緒に死に、どちらが孤児を育てるかは、以上のようにして決まる。それぞれの役割は結果的には『史記』趙世家などと同じであるが、年齢という条件によって合理化が図られている。公孫杵臼はもとも中大夫の地位にあったが、道はずれた靈公のもとで賊が恩寵を受け賢人が困窮する(原文は注8に引用)のに耐えられず、退職帰農した人物である。すでに七十歳であるので、いずれにしても老い先長くはないと、先に死ぬ役割を引き受けるのである。

### 3 演じる二人——公孫杵臼・程嬰

第三折は、演技する劇中人物を俳優が演じるという二重の演技が見られる、元雜劇のなかでも特異な場面である。登場人物のうちの二人、程嬰と公孫杵臼は、二人で考えた筋書きにしたがって演技する。屠岸賈に密告する程嬰、孤児をかくまう公孫杵臼、自らの意志に関わりなく孤児を演じさせられる程嬰の子。役者は三人である。しかも、それは演技であることが露呈してはならない演技、現実と見分けがつかない演技でなければならない。それが困難であることは、屠岸賈が端から疑いを抱くことから容易に予測できる。<sup>13)</sup>

〔做見科、屠岸賈云〕兀那厮、你何人。〔程嬰云〕小人是個草沢医士程嬰。〔屠岸賈云〕趙氏孤児今在何処。

〔程嬰云〕在呂呂太平庄上公孫杵臼家藏着哩。〔屠岸賈云〕你怎生知道来。〔程嬰云〕小人与公孫杵臼曾有一面之交、我去探望他。誰想臥房中錦繡繡褥上、躺着一個小孩兒。我想公孫杵臼年紀七十、從來沒兒沒女、這個是那裏

来的。我說道這小的莫非是趙氏孤兒麼。只見他登時變色不能答応。以此知孤兒在公孫杵臼家裏。（屠岸賈云）咄、你這匹夫、你怎瞞的過我。你和公孫杵臼往日無讎、近日無冤、你因何告他藏着趙氏孤兒。你敢是知情麼。說的是万事全休、說的不是、令人、磨的劍快、先殺了這個匹夫者。（程嬰云）告元帥暫息雷霆之怒、略罷虎狼之威。聽小人訴說一遍咱。我小人与公孫杵臼原無讎隙。只因元帥伝下榜文、要將普国内小兒拘刷到帥府、尽行殺

(13) 『史記』趙世家は、そのような具体的な困難を感じさせることはなく、淡々と記述する。注11に引用した箇所につづく部分は次のとおりで、この場面に屠岸賈は登場しない。將軍たちが程嬰とともに公孫杵臼のもとを訪れ、公孫と赤子を殺す。

程嬰出、謬謂諸將軍曰、嬰不肖、不能立趙孤。誰能与我千金、吾告趙氏孤處。諸將皆喜、許之、発師随程嬰攻公孫杵臼。杵臼謬曰、小人哉程嬰、昔下宮之難不能死、与我謀匿趙氏孤兒、今又売我。縦不能立、而忍売之乎。抱兒呼曰、天乎、趙氏孤兒何罪、請活之、独殺杵臼可也。諸將不許、遂殺杵臼与孤兒。諸將以為趙氏孤兒良已死、皆喜。然趙氏真孤乃反在、程嬰卒与俱匿山中。

程嬰は出てきてわざと將軍たちに言った、「わたしは力がなくて趙氏の孤兒を守り立てることができない。誰か千金をくれるなら、孤兒の居場所を教えよう」。將軍たちは皆喜んでそうすることにし、軍勢を連れて程嬰についてゆき、公孫杵臼を討つことにした。杵臼はわざとと言う、「程嬰はつまらぬ男だ。かつて趙家の私邸で惨事があったときに死ぬことができず、わしと趙氏孤兒をかくまうことに決めたのに、今度はわしを売るとは。たとえ守り立てられないとしても売ることはないだろう」。赤子を抱いて叫んで言った、「天よ天よ。趙氏の孤兒に何の罪があるう。どうか助けてやってくれ。わたしだけ殺せばよからう」。將軍たちはそれを認めず、杵臼と孤兒を殺した。將軍たちは趙氏孤兒が本当に死んだと思つて皆喜んだ。しかし真の孤兒はしっかり生きており、程嬰と一緒に山中に隠れたのである。

壞。我一來為救普国内小兒之命、二來小人四旬有五、近生一子、尚未滿月。元帥軍令、不敢不獻出来、可不小人也絶後了。我想有了趙氏孤兒、便不損壞一國生靈、連小人的孩兒也得無事、所以出首。

(会うしぐさ、屠岸賈せりふ) こやつ、おまえは何者だ。(程嬰せりふ) わたくしは町医者程嬰です。(屠せりふ) 趙氏孤兒は今どこにいる。(程せりふ) 呂呂太平村の公孫杵臼の家にかくまわれています。(屠せりふ) おまえはどうして知ったのだ。(程せりふ) わたくしはかつて公孫杵臼と少しばかり付き合いましたので、訪ねていったところ、なんと寢室のきれいな錦のふとんに小さな子どもが寝ていました。公孫杵臼の年は七十、ずっと子どもはいなかったのに、どこから来たものかと思ひ、趙氏孤兒ではないだろうと言つと、すぐに顔色が変わり、答えられませんでした。そういうわけで孤兒が公孫杵臼の家にいると知ったのです。(屠せりふ) くら、こいつめ、わしはだまされなぬぞ。おまえと公孫杵臼は昔も今も何の怨恨もないのに、おまえはどうして趙氏孤兒をかくまっていると密告するのだ。何か裏があるのだろうか。きちんと説明できればそれでよいが、できなければ、おい、刀を研いでおけ、まずはこいつから殺してやろう。(程せりふ) 元帥どの、しばし雷霆のような怒りをしずめ、虎狼のような威勢を取めて、わたくしのお話を聴きください。わたくしと公孫杵臼とは仲たがいをしております。ただ、元帥どのがおふれを出し国中の赤子をお屋敷に連行してすべて殺そうとされたからです。一つには国中の赤子の命を救うため、二つにはわたくし四十五歳で先ごろ一子を得て、まだ一月になりません。元帥の命令とあれば差し出さないわけにはいかず、わたくしは後継ぎを失うことになるではありませんか。趙氏孤兒が見つければ、国中の命を損なわずに済み、わたくしの子も事なきを得ます。そういうわけで出頭したのです。

これで屠岸賈もひとまず納得し、部下を連れて程嬰とともに太平庄に向かう。公孫杵臼の家にやってくると、趙氏孤児をかくまっているだろうと迫る。ここから先、程嬰と公孫杵臼の渾身の演技が練りひろげられる。

あくまでもしらを切る公孫杵臼を、屠岸賈は部下に命じて棒で打たせる。それでも孤児をかくまっていることを白状しないので、屠岸賈は、今度は程嬰に打たせる。棒は三本あり、細いを選ぶと痛みを少なくするためだろうと疑われ、太いのを選ぶと早く殺して白状するのを妨げるのだろうと疑われるので、中くらの棒でしたたかに打つ。つまり、屠岸賈の疑いは完全に晴れてはいないのである。

二人は、示しあわせて芝居を打っていることを決して屠岸賈に知られてはならない。すぐに白状してしまつてはおかしいが、口がきけないほどの瀕死の状態になると芝居が終わつてしまふ。しかも公孫杵臼は、この折の歌唱者である。戯曲においてうたの内容は他の人物には聞こえないものと見なすことができるが、公孫杵臼のうたは部分的に屠岸賈に聞こえており、共犯者がいると疑われる。このあたりの公孫は危なっかしく、予定どおりに演技を続けられているのかどうか、観客（読者）の印象も曖昧である。<sup>(14)</sup> やがて屠岸賈の部下が赤子を見つけてくると、屠岸賈は喜び、刀で斬り殺す。程嬰は我が子が目の前で殺されるのに耐えなければならぬ。

(14) 元曲選本のテキストは元刊本（あるいはその系統の本）を改変したものと考えられる。おそらく元刊本では心中の思いとして、他の人物には聞こえないという前提で作られた曲を、元曲選本では屠岸賈や程嬰の入れざりふとのやりとりで改変したものがあるのではないか（たとえば【水仙子】）。第三折の曲辞はそのために無理が生じ、状況がつかみがたいが、かえって観客（読者）をはらはらせる効果をもたらしているとも言える。

〔屠岸賈怒云〕我拔出這劍來、一劍、兩劍、三劍。〔程嬰做驚疼科、屠岸賈云〕把這一箇小業種剝了三劍。兀的不稱了我平生所願也。〔正末唱〕

【梅花酒】呀、見孩兒臥血泊、那一個哭哭号号、這一個怨怨焦焦。連我也戰戰搖搖。直恁般歹做作、只除是沒天道。呀、想孩兒離褥草、到今日恰十朝、刀下処怎耽饒、空生長枉劬勞。還說甚要防老。

【収江南】呀、兀的不是家富小兒驕。〔程嬰掩淚科〕〔正末唱〕見程嬰心似熱油澆、淚珠兒不敢对人拋。背地裏搵了。沒來由割捨的親生骨肉吃三刀。

〔屠岸賈怒つていう〕この刀を抜いて、一振り、二振り、三振り。〔程嬰びくつとするしぐさ、屠岸賈せりふ〕この厄介者に三回刀を食らわせてやった。日ごろの願いがかなったぞ。

〔公孫杵臼うた〕やつ、見れば赤子は血だまりに横たわり、あちらでは泣き叫び、こちらではじりじりと怨みを募らせ、わしまでびくびく震える。これほどの悪行三昧、まったくの非道なふるまい。ああ、思えば赤子はしとねより引き離され、今日までちょうど十日、斬り殺されて、どうして許せよう、育ての苦労も水の泡、老後の世話などかなわぬ夢。

〔公孫うた〕ああ、家が金持ちだと子どもはわがままというけれど。〔程嬰、涙をぬぐうしぐさ〕〔公孫うた〕見れば、程嬰の心は煮えたぎった油を注いだよう。涙の雫が落ちるのを人には見せられず、こっそりぬぐう。理不尽にも血を分けた子が犠牲になり、三度も切りつけられたのだ。

程嬰は、内心では悲痛な思いをしながら、孤兒（実は自分の子）が見つかり、屠岸賈に斬り殺されるのを平気な顔をして見ていなければならない。しかもこの計略を考えたのは自分自身なのである。このあと公孫杵臼は、階段の土

台に身を打ちつけて自殺する。

こうして、孤児を守るといふ二人の計略は成功した。しかしそれは成功というにはあまりに無惨である。命がけの演技の果てに公孫杵臼は命を絶ち、程嬰の実子は斬殺された。これで孤児は死んだことになったので、二度と殺されることはない。屠岸賈は大いに満足して程嬰に感謝する。

〔屠岸賈云〕程嬰、你是我心腹之人、不如只在我家中做個門客。抬拳你那孩兒成人長大、在你跟前習文、送在我跟前演武。我也年近五旬、尚無子嗣。就將你的孩兒与我做個義兒、我偌大年紀了、後來我的官位、也等你的孩兒討箇應襲。你意下如何。〔程嬰云〕多謝元帥抬拳。

〔屠岸賈せりふ〕程嬰、おまえはわしが心から信頼できるやつだ。ぜひとも我が家の門客となつてほしい。おまえの息子が大きくなつたら、おまえのところで学問を身につけ、わしのところへ来ては武芸の稽古をすればよい。わしもそろそろ五十になるが、まだ後継ぎがない。おまえの息子をわしの義理の息子にして、わしが年をとつたら、官位はおまえの息子に継がせようと思うが、どうかね。〔程嬰せりふ〕元帥のお引き立て、かたじけなく存じます。

屠岸賈はもはや程嬰を疑うことはなく、門客に迎える。さらに程嬰の息子を自分の義理の息子にするといふ最高の待遇を約束する。これは本劇における最大のアイロニーであると言えよう。程嬰の演技はまだ終わらない。

#### 4 真実の開示——程勃／屠成／趙氏孤児

第四折に入ると、すでに二十年という時間が経過している。この間、孤児は程勃および屠成という二つの名を持つ二重の存在として成長し、文武両道の若者となる。屠岸賈は満悦至極で「この子の力を頼みに近々計略を立て、靈公を殺して晋国を奪おう」（せりふ原文…就着我這孩兒的威力、早晚定計、弑了靈公、奪了晋国）とねらっている。一方、程勃（屠成⇨趙氏孤児）は二人の父に育てられる幸福を満喫し、「明君である晋の靈公を支え、賢臣である屠岸賈を助けよう」（醉春風）曲原文…我則待扶明主晋靈公、助賢臣屠岸賈」とはりきっている<sup>15</sup>。

武芸の稽古から戻った程勃は、程嬰が書斎で思い悩み涙を流しているのを見る。程嬰は孤児を救出するまでの一連の出来事を絵にした巻物を、わざと程勃の目に入るように置いておく。程勃は父に絵の由来をたずね、程嬰は解説を始める。巻物の絵は、本劇の冒頭で屠岸賈のせりふで言及されるのみであった趙盾の殺害計画、および鉏麂・靈輒・提弥明によるその阻止の場面から始まっている。程嬰は最初、屠岸賈を「赤い服の男」（原文…穿紅的）、趙盾を「紫の服の男」（原文…穿紫的）と呼び、実名は明かさないが、途中で趙盾の名を告げる。

〔正末云〕這箇穿紫的可是姓什麼。〔程嬰云〕這箇穿紫的、姓趙、是趙盾丞相。他和你也閥親哩。〔正末云〕您孩兒聽的説有箇趙盾丞相、倒也不會掛意。〔程嬰云〕程勃、我今番説与你呵、你則緊緊記者。

（程勃せりふ）この紫の服の人の姓は。（程嬰せりふ）この紫の服の姓は趙、趙盾丞相だよ。おまえとも親戚だ。（程勃せりふ）趙盾丞相という人がいたことは聞いたことがあります、気に留めませんでした。（程嬰せりふ）程勃、これから話してやるから、しっかりと覚えておくのだぞ。

このように述べて程嬰は趙盾の一族三百人の誅殺、趙朔の自害、公主の出産などを語ってゆく。「草沢医士程嬰」も登場するが、自分とは別人ということにして（原文…天下有多少同名同姓的人、他另是一個程嬰）話を進める。す

べてを話し終わると、これは二十年前の出来事であり、趙氏孤児は今や二十歳、父母の仇を討たずにはいられないだろうと告げる。しかし、屠岸賈は最後まで「穿紅的」と呼ばれているため、他人事として聞いていた程勃はまだ要領を得ない。

〔程嬰云〕元来你還不知哩。如今那穿紅的正是姦臣屠岸賈、趙盾是你公公、趙朔是你父親、公主是你母親。〔詩云〕我如今一一説到底、你剗地不知頭共尾。我是存孤棄子老程嬰、兀的趙氏孤児便是你。〔正末云〕元来趙氏孤児是我、兀的不氣殺我也。〔正末做倒、程嬰扶科云〕小主人、甦醒者。〔正末云〕兀的不痛殺我也。

〔程嬰せりふ〕なんだ、まだわからないのか。実はあの赤い服の男こそは姦臣屠岸賈、趙盾はおまえの祖父、趙朔はおまえの父親、公主はおまえの母親なのだ。〔詩〕わしが今すべてをつぶさに説き明かしたのに、おまえはまだ顛末がわからぬか。わしこそは孤児を生かすため我が子を諦めた程嬰、この趙氏孤児こそはおまえなのだぞ。〔程勃せりふ〕趙氏孤児がわたしたつたとは。なんと腹立たしいことだ。〔程勃たおれ、程嬰たすけ起こすしぐさで〕若さま、しっかりとってください。〔程勃せりふ〕なんとつらいことだ。

以上のように第四折では、第三折の孤児救出から二十年後のもう一つのドラマ——孤児が思いも寄らなかつた真実を知るといふ、歴史書にはないドラマが展開する。一連の出来事が文字ではなく絵に描かれているため、すぐには全容が明らかにならない。程勃は巻物の絵をきつかけに程嬰の話聞き、少しずつ真実に近づいてゆく。観客（読者）

(15) 元刊本では【醉春風】曲の同じ箇所は「俺待反故主晋靈公、助新君屠岸賈」に作る。すなわち、屠岸賈が靈公を倒そうとしていることを程勃も知っていることになる。

は程嬰とともにすべてを知りつつ、再びかつての屠岸賈の悪行をふりかえり、程勃がついに自分が孤児であることを知る決定的場面に立ち会う。程嬰と程勃とのせりふによる対話は長く、第四折だけを上演しても（読んでも）本劇の全体の流れを知ることができる。上演時の効果を考慮に入れた構成であるといえよう。

自分が趙氏孤児であることを知った程勃が、程嬰に感謝しつつ屠岸賈への復讐を決意するところで第四折は終わる。元曲選本にはあらずじに示したように第五折があるが、屠岸賈が真実に直面する場面はあつてなく、あとは予想どおりに終局へ向かうのみである<sup>16</sup>。

### 三 劇的人物への変身

以上、本劇の歴史記述との差異および演劇的構成を確認した。次に、主要な人物について、これまでに論及しなかつた点を補いたい。

#### 1 程嬰の造型

本劇において楔子と五折のすべてに登場するのは悪役の屠岸賈のみであり、程嬰はそれに次いで登場が多い（楔子を除く各折に登場<sup>17</sup>）。しかし歌唱者は、趙朔（楔子）、韓厥（第一折）、公孫杵臼（第二折・第三折）、程勃（孤児）（第四折・第五折）であり、程嬰は歌唱しない<sup>18</sup>。雑劇では歌唱者を主役と見なすがふつうであるとはいえ、本劇で

もつとも重要な登場人物は程嬰であり、その造型に細心の注意がはらわれていることは、歴史記述と比べるとはつきりする。

劇中では程嬰は趙朔の家に出入りする医者である。『史記』趙世家では趙朔の友人（原文…朔友人程嬰）であつた程嬰に対するこの変更こそが、この作品を演劇として成立させているといつても過言ではない。第一折で程嬰が初めて登場するときのせりふを見てみよう。

〔外扮程嬰背葉箱上云〕自家程嬰是也。元是箇草沢医人、向在駙馬府門下、蒙他十分優待、与常人不同。可奈屠岸賈賊臣將趙家滿門良賤、誅尽殺絶。幸得家属上無有我的名字、如今公主囚在府中、是我每日伝茶送飯。那公主眼下雖然生的一個小廝、取名趙氏孤兒、等他長立成人、与父母報讎雪冤、只怕出不得屠賊之手、也是枉然。聞

(16) 予想どおりといつても、第五折には前折までとのあいだに不整合がある。まず、第四折までは靈公であつた晋の君主が唐突に悼公に代わる（史実では在位の順序は靈公・成公・景公・厲公・悼公）。ただし上卿の魏絳は実際に悼公の時代の実在の人物であるので、そのつじつまは合っている。また、第四折で程嬰は「明日になったらまず主君と朝廷の大臣たちにお目通りして、この手で賊を殺してくれよう」（原文…到明日我先見過了主公和那滿朝的卿相、親自殺那賊去）と述べるが、第五折では捉えた屠岸賈を魏絳に引きわたし、屠岸賈は刑死することになる。以上のことから、第五折は後から付加されたものと推察される。

(17) 第一折以降、程嬰はつねに孤兒と一緒にいるが、生まれたばかりの赤子なので登場人物とは言えない。上演時にはおそらく人形が用いられたであろう。

(18) 中盤までの趙朔、韓厥、公孫杵臼は次々と死んでゆくので歌唱者は交替せざるをえない。

的公主呼喚、想是産後要什麼湯藥、須索走一遭去。

(程嬰、葉箱を背負つて登場、せりふ) わたしは程嬰です。町医者をしておりましたが、駙馬どののおやしきで特別に手厚く遇していただきました。あろうことか、賊臣屠岸賈は趙家の一門を、身分を問わず皆殺しにしました。わたしの名は一族のうちには入らず、命拾いをいたしました。奥方は今やしきに幽閉され、わたしが毎日食事を届けております。その奥方は男の子を産んだばかり、趙氏孤児と名づけ、大きくなったら父母のために仇を討ち無実の罪をすぐくことでしようが、屠岸賈のやつの手を逃れられなければそれかありません。奥方がお呼びだとのこと、きっと産後に何か湯藥があるのでしよう。行つてこななくてはなりません。

程嬰は趙朔に厚遇されてはいたが、友人ではなく医者としてやしきに出入りする身であつた。医者であれば、やしきに幽閉されている公主に食事を届けても奇異ではないし、産後に診療や投薬を行うのも自然であり、葉箱を所持しているのは当然である。この葉箱があるからこそ、劇中で孤児を運び出すという行為を演じることができるのである。

また、程嬰と趙朔の関係は公的な君臣関係の外にあるためか、屠岸賈には知られていない。したがって、程嬰が孤児の居場所を密告してもさほど不審ではない。友人であつたとすれば、そうはいかないだろう。

程嬰についてのもう一つの重要な変更は、第二節の2でも触れたように、程嬰に生後まもない赤子がいることである。この設定によって、我が子を犠牲にして孤児を救うという壮絶な劇が成立する。これが他人の子であれば、劇的緊張は著しく損なわれるだろう。我が子かわいさに密告するといふまことしやかな理由によって屠岸賈を納得させつつ、実はそれとは裏腹に、我が子の命を奪う結末に向かつて演技をしつづける程嬰は、観客(読者)に強烈な印象を

与える。公主や韓厥の自死の場面を見ると、程嬰は秘密が露見することをおそれて人を信用せず死に追いやる人物のようにも思えるが、程嬰も実子という一つの命を棄てているのである。

さらに付言すれば、程嬰は孤独である。趙世家では、韓厥が生きており、程嬰が孤児をかくまっていることを知っているのに対し、劇中では真相を知っているのは程嬰のみであり、屠岸賈の門客という本来であれば不本意な境遇に耐えることで、その孤独はますます際立つのである。

## 2 屠岸賈と孤児のアイロニー

程嬰は屠岸賈のやしきに門客として迎えられ、息子の程勃（実は趙氏孤児）は、それぞれ文と武に秀でた二人の父によって育てられる。『史記』趙世家には、程嬰は孤児を連れて山中に隠れた（原文・程嬰卒与俱匿山中）とだけ記されているのであるから、ちがいはきわめて大きい。<sup>(20)</sup>

屠岸賈と孤児という本来は共存できないはずの二人が同じやしきで親子として暮らす——この状態が二十年続いた（19） 実の子を身替わりにして死なせるのは極端な行為ではあるが、屠岸賈は孤児が見つからなければ赤子を皆殺しにしようとしているので、結局程嬰の子も殺されることになる。真の孤児を差し出さなにかぎり、いずれにしても子の命は奪われるのである。

(20) 『史記』趙世家では、復讐は十五年後である。程嬰はその後、趙武が成人を迎えるのを待つて、泉下の趙盾・公孫杵臼に報告すると言つて自害し、趙武は三年の喪に服する。

時点から第四折は始まる。ここで強調されているのは、孤児と屠岸賈の無知である。屠岸賈は自分が趙氏孤児を殺したと信じており、趙氏孤児は自分が程嬰の子であると信じている。不倶戴天の敵とも言える二人には、実は、この無知という共通点がある。特に屠岸賈は、孤児をそれとは知らず義子として、自ら得意の武芸を教えてその上達を喜んでいる。

観客（読者）がこの最大のアイロニーを目にした直後、程嬰は二十年間続けてきた演技をやめて、真実を告げる。無知が知に転ずると同時に、虚偽の存在であった程勃／屠成は死んだはずの趙氏孤児に変身し、屠岸賈への復讐を決意する。ついに虚偽は真実へ、死は生へと反転するのである。

### おわりに

元雑劇「趙氏孤児」は、歴史記述にすでに含まれていた、程嬰と公孫杵臼による演技という要素を生かすとともに、演劇としてのリアリティを追求して構成を考え、登場人物を造型した作品である。

最後に復讐が果たされることになるとはいえ、復讐そのものがドラマであるというわけではない。そこに至る過程こそがドラマなのである。趙氏孤児の命を救い、成人になるまで育てた程嬰にとつては、演じることが生きることであつた。本劇によって観客（読者）は、俳優の演技を見るのみならず、俳優が扮する程嬰の演技をも見るといふ二重の演劇性を体験する。前節で見たように、それを際立たせるのが、劇中人物の孤独と無知であつた。

孤独は、程嬰によって体現される。孤児が生きのびるには、死んだことにするしかない。孤児は人目をあざむく偽

装によって守られる。本劇では、悪人がだまし善人がだまされるのではなく、善人がだまし悪人がだまされる。ただひとり真実を知っている程嬰にとつては、二十年間うそをつきつづけ、隠しとおすことが正義であつた。その長きにわたる孤独な生が、直接的に描かれるのではなく、第三折と第四折の転換によって観客（読者）に感得される。

一方で、無知を体現するのが孤児と屠岸賈である。孤児は、敵である屠岸賈と親愛のうちに二十年を過ごしていた。孤児は自分が何者であるのかわかっていない。屠岸賈は自分がだまされていることを知らない。無知の大いなる特徴は無知の無知、すなわち自分は何もわかっていないということがわかっていない、ということである。その意味で、孤児と屠岸賈もまた、自覚せざる孤独を生きていたとも言えるだろう。

このように、程嬰・孤児・屠岸賈はそれぞれに「孤」性を身にまとつた人物たちである。忠孝をテーマとするいかにも「中国的」な作品のように見えて、実は孤独や無知という普遍的な人のあり方を表現し得ていること。それによつて本劇は、洋の東西と時代を問わず、繰り返かえし演じられるに至っているのではないだろうか。

死こそが生であり、虚偽のうちに真実がひそむ。本劇は、演技することによつて、生と死、真と偽の境界を踏みこえて、真にたどり着く劇である。歴史記述の空白は、論理的想像力によつて埋められた。ここでは論理と想像力が対立するのではなく補いあいながら、演劇を成立させている。「趙氏孤児」とは、その演劇的想像力による歴史記述の再演であると言えよう。



# Logic and Irony in the Drama of the *Orphan of Zhao* 趙氏孤兒

Reiko HIROSE

*The Orphan of Zhao* is a masterpiece of Yuan drama. The story is based on the historical records on Jin 晉 state during the Spring and Autumn period, such as *Chunqiu Zuoshizhuan* 春秋左氏傳 and *Shiji* 史記.

The synopsis of the play is as follows. In the era of Duke Ling 靈公, General Tu'an Gu 屠岸賈 had the hatred towards Minister Zhao Dun 趙盾. Tu'an Gu intended to kill every member of the family and the Zhao family faced the extinction. Under the conspiracy of Tu'an Gu, the last member Zhao Shuo 趙朔, the son of Zhao Dun, was falsely condemned and was forced to kill himself. His wife was pregnant then and gave birth to a boy after Zhao Shuo's death. Cheng Ying 程嬰, who was the home doctor of Zhao family, hid the orphan in the medicine chest and took him out of the palace. Tu'an Gu, knowing that the orphan was hidden, decided to kill all infants in Jin if the orphan in the search was not found. Facing this situation, Cheng Ying consulted the retired minister Gongsun Chujiu 公孫杵臼 and proposed a plan to save the life of the orphan. According to the plan, Cheng took his own son to Gongsun and then informed Tu'an Gu of his place, pretending that he was the orphan in the search. Tu'an Gu was deceived by their acting and killed the child whom he believed to be the orphan. Tu'an Gu was satisfied and adopted Cheng Ying's son, who is in fact, the orphan. After twenty years, Chen Ying told the orphan the truth. The orphan immediately carried out

his revenge.

Although the historical records serve as the outline source of the story, they do not provide details. The author discusses how this play successfully supplemented the lacking details with logical and plausible reasoning, in conjunction with addition of effective dramatic imagination. Along with the dramatic irony of Tu'an Gu who was unaware of the truth, *the Orphan of Zhao* has achieved the popularity as a well-constructed drama.